

重点目標： 他者理解、自己表現、集団参加、感情調整等の社会性の育成

【評価の観点】 A：達成できた B：ある程度達成できた C：やや不十分、一部改善の余地がある D：改善が必要である

部	評価項目	具体策	評価基準	評価	成果・児童生徒の変容	反省・改善
知的障害教育部門 小学部	○個々の能力に応じた望ましい表現方法を身に付け、意思や感情を表現する基礎的な力を高める。	○「自立活動」等の授業実践を通して、児童達が表現したいという意欲が高められるような指導方法の検討や教材の工夫等を行っていく。	○一人一人が適切なコミュニケーション能力を獲得し、自分の伝えたい気持ちを表現することができるようになったか。	B	・発語の有無にかかわらず、絵、文字、写真、サイン等を理解し、それらを活用しながら、コミュニケーションをとろうとする児童達の意欲の高まりが感じられた。また、あいさつ、要求、依頼、気持ちや感情等を表現できるようになった児童が増えた。	・1年間の成果を個人や学年ごとに事例検討会等を通して職員間で確認できた。 ・個別に、伸ばした部分や課題を明らかにした上で、次年度にむけてステップアップした目標を設定する。 ・学部共通のサイン一覧表や写真・絵カードを継続して活用する。 ・他学部への引き継ぎ資料、保護者への情報提供としても活用する。
	○好ましい対人関係を形成し、集団参加の基礎的な力を養う。	○日常の学習活動や行事等を通して、人とのやりとりを楽しみ、決まりを守りながら集団活動に参加できるような場面や活動を設定する。	○友達や教師と良好な関わりを持ちながら、決まりを理解し、集団の中でも安定した気持ちで活動していたか。	B	・多くの児童が約束、決まりを守りながら、友達と一緒に活動を楽しんだり、仲良く関わったりできるようになってきた。また、学級・学年等の集団の大きさや日程変更等の変化があっても、感情をコントロールしながら、安定した気持ちと態度で学習活動に取り組めるようになってきている。	・定期的に事例検討会やブロック会等を行い職員間で共通理解しながら指導を行った。 ・今後も学部研究等を通して、職員が同じ方向性を持ちながら授業、指導方法について、深めていく。 ・積極的に決まりやルールを理解できるような授業を実践していく。
知的障害教育部門 中学部	○個々の実態に応じた意思の表出を含むコミュニケーション能力の向上を図る。	○グループ学習など授業実践において、自分の考えを述べたり、互いにやりとりをする場面を設定し、個に応じた支援を行う。	○個に応じた支援を行う中で、自分の考えを伝えたり、相手からの関わりを受け入れたたりする力が身についたか。	B	・自分が頑張ったことや、ありがたいの気持ちを伝える発表、友達の良い点を見つけて発表することで、相手を思いやる気持ちが育ってきた。 ・学校生活全般において自分なりの方法で意思を伝えたり、やりとりしたりするなかで、関わりを楽しむ様子が多く見られた。	・言葉での伝達が難しい生徒については教師が表情や動きを汲み取って伝えているが、意思の表出をさらに促すようなカードを使用するなど支援の工夫が必要である。 ・生徒同士のやりとりが難しい生徒については、答えの出しやすい授業を行うとともに、やりとりしやすい雰囲気作りに心がける。
	○様々な集団において決まりや役割を理解し、	○集団活動を通して決まりや自分の役割を理解し、周	○様々な集団の中で決まりや役割を意識	B	・学級の仕事や行事において、自分の係や役割を理解して動くことができた。互	・係の仕事を毎日行うことで、見通しを持ってできるよう継続して

	協調性の育成を図る。	囲と協力して活動に参加できるよう支援を行う。	し、互いに協力して活動できたか。		いに協力して活動に取り組んだり、自ら手伝いをしたりする様子が見られた。	いく。また、授業の中で、生徒が一緒に取り組みやすい場面を設定し、達成感を味わえる授業を展開していく。
知的障害教育部門 高等部	○職業的自立に必要な基本的及び実践的なコミュニケーション能力を高める。	○作業学習等の授業実践を通して、指示理解や意思の表出等に関する指導に努め、個々の能力の向上を図っていく。	○作業学習等や校内実習、産業現場等における実習の評価において、必要とされるコミュニケーション面に伸長が見られたか。	全体 B	・実習で明らかになったコミュニケーション面の課題を普段の学校生活の中でも意識する様子が生徒に見られた。 ・仲間や教師に伝えなければならないことを自分の言葉で伝えることができた。実習においても同様に、報告や質問ができた。	・コミュニケーションに関し、教員が手本となるよう取り組む。 ・全体指示の返事や困ったときの質問など学校全般を通して意識を高めていけるよう取り組む。
			・出された指示等を正しく理解する力が身に付いたか。	B	・指示を正しく理解する、忘れないようにするためにメモを活用し話を聞く様子が多く見られるようになってきた。 ・自分なりの判断や解釈で行動することが少なくなってきた。	・メモをとり活用できる習慣の定着を更に目指すと共に、生徒の指示理解度を教員が十分に把握し、指導支援にあたる。
			・自分の考えを述べたり、他に対して自分から意思疎通を図るよう努めることができたか。	B	・具体的に自分の考えを伝えることを、クラスで実践し少しずつ言えるようになってきた。 ・グループワークを取り入れたり、協力する場面を経験することで、声を掛け合う様子や周囲と協力して活動する様子が見られるようになった。	・生徒個々に合わせて支援し、成功体験を重ね、自信に繋がるように配慮していく。
	○社会の一員としての自覚を持ち、感情を調整しながら適切に行動する力を身に付ける。	○自分の役割と他人の立場を理解し、感情を調整しながら互いに協力し合うことが出来るように支援する。	○感情をコントロールし、相手の立場になって行動することができたか。	B	・集団生活の中で自分の気持ちや友達の気持ちを考えて行動することができるようになった。 ・衝動的な行動を振り返り、行動を改めようとする意識を持つことができた。	・生徒が安定した気持ちで過ごせるよう、言葉掛けや見通しを持ちやすい環境等の配慮をしていく。 ・生徒の実態、障害特性もあり、長い目で取り組んでいく必要がある。
肢体不自由教育部門	[通常課程] ○自分の気持ちや考えを適切に伝えたり、相手の立場に立った言動や行動をしようとする意欲、態度を身に付ける。	○自分を肯定的にとらえられるような題材を道德及び自立活動の領域で取り上げる。また、周囲と協力しながら活動できるように場面を設定し、その都度目標設定を伝え、意欲喚起	○自分の気持ちや意見を場に応じた言葉遣いで的確に表現することができたか。 ○場に応じた行動を自らとることができたか。		在籍なし	在籍なし

		を図る。				
小学部	[重複障害学級] ○身近な人に対する表現力を高め、落ち着いた態度で集団活動に参加する力を身に付ける。	○的確な実態把握を継続し、効果的な内容の授業実践を行った上で個々の評価を行う。	○児童一人一人のコミュニケーション能力を的確に評価し、課題を明確にすることができたか。	B	・アセスメントの実施の継続により、全教師がある程度客観的な児童の実態把握及び実態に応じた指導を行うことができた。また、定期的な情報交換や検討会により、児童の表出に対する読取や評価が多角的に行え、コミュニケーション能力の向上に繋がる児童が多くいた。	・さらに児童の表出に対する的確な読取や実態にあった指導を行っていく。 →定期的な情報交換や検討会を継続する。 →PDCAサイクルの実践の継続と評価の観点について検証を重ねる。
	○身近な決まり、約束を守って行動する力を高める。	○集団での学習機会を定期的に設定し、決まりや約束を理解しやすいような教材や支援方法を検討していく。	○授業の工夫や教材・支援方法の検討を継続して行えたか。	B	・定型の集団での学習機会を意識的に設定し繰り返すことで、順番や簡単な約束事を理解できる児童が増えた。	・関わる教師が同じ対応をとることでさらに簡単な決まり、約束の理解定着を図っていく。 →定期的な情報交換や検討会で議題として出し、支援方法や授業の教材等の工夫について共通理解を図る。
肢体不自由教育部門 中学部	[通常学級] ○様々な人と関わる経験を重ね、感情調整をしながら良好な対人関係を積極的に築こうとする力を高める。	○交流学习や教科学習、芸術体験学習の場を設定し関わる人に合わせた態度や会話の指導をする。	○様々な授業を設定する中で、場や人に合わせた関わり方や話し方ができたか。	B	・様々な交流学习、学校行事等、また、放課後の施設利用から、言葉遣いや態度等学び、良い関わりができてきている。	・1対1の授業の中でも基本的な話し方を定着させていくことが課題である。 良い関わりを認め、その行為や考え方を強化し、よりよい人間関係が築けるようにしていく。
	[重複障害学級] ○学部や学部を超えた集団学習の中で、意思や意見を伝え、集団生活を築く力を身に付ける。	○一日の学習の中で、自らの意思の表出が明確に出た際や様々な機器等を用いて意思表示ができた際には賞賛し、表出の定着を図る指導をする。	○様々な集団学習を組むことで、個に応じた表現方法で自分の気持ちを表わすことができたか。	B	・集団での一斉授業では、理解の難しい生徒に対して、個別に指導をしたが、落ち着かない様子が見られ、適切な意思表出に結びつかなかった。 ・発語が少ない生徒については、タブレット等の機器や絵カードを使用して、表現しようとする意欲が増えた。また、言葉でのコミュニケーションができる生徒については、より詳しく伝えようとする意識が高まった。	・生徒の実態に応じた、環境の設定や教材の工夫が課題である。 ・教師が先回りして動いてしまう。限られた時間の中でメリハリをつけた指導が課題である。 ・生徒各自の表現方法の更なる定着について、十分な共通理解を図る。
	○集団生活の中で落ち着いて様	○様々な集団学習（日生、自立、生	○見通しが持てる指導をす	B	・精神的に不安定な生徒に対し、見通しが持てる視覚	・落ち着かない友達や注意を受けている友達

	々な人と関わりながら、決まりを理解し、協力し合って生活する力を高める。	単、作業等）の中で、関わりを受け入れ、見通しを持って学習に取り組めるよう、言葉掛けや視覚的な教材の提示などを用いて指導する。	ることで、落ち着いて過ごし、友達を意識したり、決まりを理解している様子が見られたか。		的な支援（具体物や写真、絵カードやタイムスケジュールの提示、タイムタイマー）の活用で、学習に取り組めてきている。 ・友達や教室以外の教師を意識して、自分から関わり、落ち着いて過ごすことが増えてきた。	に対する関わり方が課題である。ルールを守ること、お互いを認め合うことで成長していくことができると思う。
肢体不自由教育部門 高等部	[通常学級] ○豊かな人間関係に必要となる自己の能力に応じた実践的なコミュニケーション能力を高める。	○商業、職業、家庭総合、保健、自立活動等の学習を通し、自己意識の確立や他者承認の意義等について学習を深め 社会参加の上でも重要になる相互理解のためのコミュニケーション力の基礎を育てる。	○コミュニケーション活動を相互理解の機会としてもとらえることができたか。 ○ビジネスの諸活動に適切に対応するための基本的なコミュニケーション力を身に付けることができたか。	B	・行事等の事前学習で教師の提案に対し自分の考えを述べ、意欲的に活動を計画する姿勢が見られた。また HR 教室ではクラスメイトを思いやってかかわり合う様子が見られた。 ・ビジネスマナーに関して、基本的な敬語表現をほぼ適切に行うことができた。	・意見の発表や討論の機会を十分盛り込み、自分の考えを組み立てて述べる力の習得を目指していく。 ・就労現場で求められるコミュニケーション力の確実な習得を目指していく。
	[重複障害学級] [重 1] ○集団生活、社会生活で必要となるコミュニケーション能力を高め、主体的に対人関係を築く力を身に付ける。	[重 1] ○日常生活指導、生活単元学習、作業学習の中で、あいさつや基本的な報告、意見発表、相手の意見を聞く等を十分に行い、基本的なコミュニケーション力を身に付ける。	[重 1] ○コミュニケーションの意義や便利さをよく理解し、積極的に身に付けようとすることができたか。	B	・小集団での学習の中で、今まで関わりが少なかった生徒に対して自分からコミュニケーションをとろうとする様子が見られるようになってきた。	・小集団学習の場で各生徒が表出の意欲をいっそう発揮できるように授業の工夫を試みていく。
	[重 2] ○社会生活における決まりを理解し、感情を調整しながら適切に行動する力を身に付ける。	[重 2] ○日常生活指導、自立活動の指導の中で、指導する教員が代わっても自分なりの方法で意思や気持ちを表出しようとする事ができる。	[重 2] ○教師は生徒の意思表出をその生徒に係る教員間で十分に確認することができたか。	A	・教師間での確認を踏まえ生徒に学習内容の提案や選択肢の提示等を行い、学習への生徒の主体性をより高めることができるようになってきた。 ・教師の働きかけを通し、生徒同士がお互いを意識し合う様子がより多く見られるようになってきた。	・自立活動検討会等を活用しながら今後も継続して指導する。 ・生徒同士が関わり合う学習機会を今後も確保、維持していく。
訪問	○身近な人に対する表現力を高め、安定した態度で集団活動に	○児童生徒の好きな活動を通して、「楽しい」「もっとやりたい」等の	○教師は、児童生徒の実態に応じて、「楽しい」「もっと	B	・好む活動を授業にバランス良く組み入れた結果「もっと」「早く」などの表情の変化、発声や身振りなど	・医療的ケアの生徒は心拍数や表情などに注目し好きな活動を探っているが活動の幅に限

教育 学級	参加する力を身に付ける。	表情、サインを引き出すような働き掛けをする。 ○表出の乏しい児童生徒については、丁寧な働き掛けと観察・記録を継続し、授業に生かしていく。	とやりたい」等の表情やサインを引き出したり、把握したりすることができたか。		表出を促せた。	界がある。 ・今後も引き続き、継続して指導する。
		○「集団で学習する機会」を可能な範囲で設定し、参加が実現するよう保護者や施設職員に協力を働き掛けていく。	○友達と一緒に集団活動に参加することができたか。	B	・星風院入所生には「音楽家交流」「集団学習」「本校での授業」「集団自立」「朝の会、帰りの会」など合同で行えた。日を重ねるにつれ、落ち着いて学習できるようになり、友達を意識できる生徒もでてきた。	・在宅生やベットサイドの児童生徒の集団学習の場の設定には限界がある。 ・実態をふまえ、参加できる学習の機会を設定し参加を促す努力をする。
ひばり 分教室	○集団活動を通じて、集団の一員として役割を果たし、よりよい人間関係を築こうとする意欲を高める。	○児童生徒同士の話し合いの場を設定し、自己表現力や他者理解力の向上を図る。	○特別活動や総合的な学習の時間、余暇活動等において、異学年の児童生徒同士で、相手の意見を受け入れたり、自分の意見を発表したりできたか。	A	・話し合いの場を多く設定できたことにより、下級生は、自分の意見を言えるようになった。また、上級生は、下級生の意見を受け入れることができるようになった。 ・多数決にこだわらず、少数意見も聞きながら話し合いをすることもできるようになった。	・転出入が多く、メンバーが入れ替わるため、引き続き、話し合いの場を多く設定していきたい。
		○教室に登校できない仲間のこととも思いながら、各活動に取り組めるよう、意識の喚起を促す。	○特別活動や総合的な学習の時間等において、児童生徒同士が互いに助け合って、各活動を運営できたか。	B	・教師の促しを受け、休みの友達の分の係活動を助け合うことができた。 ・自分で気付いて、自発的に休みの友達の分の係活動に取り組む児童生徒もいた。 ・話合いや作品制作、学習時に、休みの友達のことを考えられて行動することができるようになった。	・教師の促しがなくても友達のことを思い、実際に行動して助け合う力が付いてきている。まだ、教師の言葉掛けが必要な場面もあるので、意識の喚起を促すような支援を続けていきたい。
寄宿舎・ 舎務部	○集団生活の中で適切なコミュニケーション方法や気持ちの安定を図る方法の指導に努め、自分らしい余暇活動を充実させる。	○舎生が、職員の話題に（学校・舎行事）積極的に興味・関心を持つ。	○ブロック職員・舎担が取り上げた話題に興味を示し、会話ができたか。	A	・職員が取り上げた学校や寄宿舎行事の話題に興味を持ち、会話することができた。	・舎生自ら寄宿舎行事に関心を持つような具体策を考える。
		○余暇時間にＴＶのニュースを流し、話題に取り入れる。	○社会のニュースを聞き話題にできたか。	B	・寄宿舎生が興味を持てるニュースについては話題にし、話をすることができた。	・舎生によっては、興味関心を持つことが難しかったため、話題の内容や提供方法を工夫する。
		○趣味の講座（19回）において楽しめる内容にし、他	○楽しめる内容にすることができたか。	B	・寄宿舎生の意見を取り入れた内容となり、楽しい活動にすることができた。	

		の舎生と関わりを持たせる。また、各講座に職員が二人は入り、一人が指導にあたり、一人が舎生の様子を見る。	○他の舎生の意見を聞きながら、自分の考えを話すことができたか。		・職員が二人入ることで自分の意見を言ったり他の寄宿舍生の話を聞くことができた。	・舎生同士では聞くこと、話すことが難しいことがあった。職員が仲介して、意思の疎通を図る。
		○職員間で連携を図り舎生のこころの安定を図る。	○一人になれる部屋（舎監室や静養室）を利用しクールダウン（興奮を静め）し通常の生活に戻ることができたか。	A	・静養室等一人になれる部屋を利用してクールダウンすることができた。	・不安を訴える方法や気持ちを安定させる方法について具体策を考える。
教務部	○基本研修等を通し、社会性の育成に向け、授業の充実を図る。	○基本研修等での授業研究や課題研究を通し、社会性の育成に関連する学習活動の設定や指導法等について検討、考察をする。	○授業研究や課題研究を通し、実際の授業での社会性の育成に関連する学習活動の内容や設定の仕方、効果的な取組や工夫の仕方などについて整理し、成果や改善策をまとめることができたか。	B	・基本研修等での課題研究で社会性の育成に関連する内容が多く取り上げられた。また、研究授業・公開授業においても社会性を視点に置いた計画・展開・評価が概ねできた。	・今後も基本研修等での社会性の育成を大切にした取組を継続するとともに、校内研修の設定や校外での研修の紹介などで、社会性の育成に関する教員の専門性の向上に寄与する。
情報部	○タブレット端末等、情報機器の有効な活用について啓発する。	○情報部所属の教員で社会性の育成につながるようなアプリを探す。 対象となり得る児童・生徒や他者理解、自己表現、集団参加、感情調整のどの部分の育成につながっていくか、どのような場面で活用するか等をまとめる。 各学部会で情報教育・研修係より紹介をするとともに、資料を情報部フォルダに保存して、いつでも閲覧可能な状態にする。	○本校教員の興味・関心をひくような、分かりやすい紹介ができたか。	B	・研修後のアンケートでは、タブレット端末等の活用に興味・関心を示す意見が見られた。 ・実際に情報部で紹介したアプリを活用し、朝の会で「昨日の出来事」を伝える生徒が見られた。	・実際に操作する場面を取り入れるなど、より具体的で分かり易い研修を行うことで、より多くの教員の興味を引き、有効な活用が広がっていくことを目指す。
	○個に応じたコミュニケーション	○個別の指導計画の中にコミュニケ	○教育活動全体を通し、個	B	・個別の指導計画作成時、学部での研究など、折に触	・個々の生徒のコミュニケーション面での課

学 習 指 導 部	ン能力の育成のため、教員の意識向上及び資質の向上を図る。	ーションに関する目標を設定するとともに、学校全体の研究テーマを「社会性の育成」と関連付けて設定し、個々の教員が常にコミュニケーション能力育成の視点に立って適切な指導を行えるようにしていく。	々のコミュニケーション能力の向上を意識しながら、効果的な指導を行うことができたか。		れてコミュニケーションの視点について伝えていくことで、教育活動全体を通じて指導を行うことができた。	題や目標について、関わる教員間で共通理解を図り、より指導に反映させていく方法の検討。
	○児童生徒の主体的な活動を通し、児童生徒同士の関わりを深め、集団参加を促す。	○全校集会、学部集会を通し、集団参加への意欲を高めるとともにレクリエーション等を行う中で、他者理解、自己表現の力を養えるようにしていく。	○全校集会、学部集会に友達と関わり合いながら意欲的に参加することができたか。	B	・学部集会では、限られた時間の中で、関わり合いながら活動に取り組む様子が見られた。 ・全校集会では人数の関係もあり、直接的な関わりは多くはなかった。	・全校集会では、関わりの時間をメインにすることは今以上には難しい。学部集会で他部門の児童生徒と関わる時間の充実を図りつつ学校生活全般を通して他者理解につながる取組を検討する。
	○校外の様々な人々とのやりとりの中で、自らの思いを伝え、主体的に関わろうとする力を養う。	○校外での活動等において、児童生徒が他者とやりとりすることができる場面を設定したり、捉えたりし、関わりを促す。	○「様々な人々のかかわり」を目指した指導を学習内容に盛り込み、実践することができたか。	B	・学校内外で、様々な人との関わりを意識して指導を行うことができた。	・引き続き、意識して指導を行っていく。より計画的に取り組むためには、年間計画などを見直すことも検討。
交 流 教 育 部	○交流及び共同学習を通して、将来に向けて社会性や豊かな人間性を育む。	○交流活動の具体的なねらいを明確にし、係を中心に学部会等の機会での共通理解を図り、活動の充実を目指す。 ○ねらいや実施形態などについてポイントを絞って反省を行い、行事の精選や次年度の活動について検討する。	○事前に学部や学習集団で具体的なねらいを確認し、それらを実施計画に盛り込むことができた。 ○交流活動から得られる効果を、児童生徒の社会性の育成に有効活用するための検討ができた。	B B	・各学部ともねらいを確認 ・明確にして、活動することができた。(事前にねらいを話し合ったことで生徒の関わりの幅を広げることができ、コミュニケーション能力を向上させることができていた。 A 高) ・1学期に交流が重なった(B小)。	・今後もねらいを明確にして交流教育を充実させていく。 ・学部で今後の交流の在り方について意見をまとめ、交流相手と相談し、今後の交流について年度内に検討し、さらによりよいものにする。
	○双方が地域の一員としての自覚と理解を促すため、ボランティアスクールや地域連携教員の活動を通して地域の人々と連携	○多くの地域の方に本校を理解してもらえるよう養成したボランティアの自校での活用を踏まえ、講座の内容を検討する。	○本校のニーズを基に講座内容を設定し、参加者の受講アンケートを活かし、より分かりやすい講座が提供で	B	・本校でのボランティア活動を想定した講座内容を設定することができた。体験的な内容を多く盛り込み、より実践に近い講座を実施することができた。	・講座については、回数を縮小しつつ、現在同様の内容を提供できるように検討する。(6回→4回へ)

	を深める。	○地域連携教員は、栃木市や皆川地区の情報を積極的に収集し（研修会も含む）、地域と学校のコーディネートに努める。	きるよう内容の検討をすることができた。 ○積極的に地域に出向き（研修会も含む）、情報収集や発信をして、双方に還元することができた。		・研修会などで得た情報を他の教員につなぎ、アシストネットとの打ち合わせや栃木市蔵の街高校生文化祭に地域連携教員以外の教員の協力を得て活動を深めることができた。	・交流教育部を中心に地域連携に関する活動を広げていくとともに、地域連携教員の職務をまとめ、全職員に配布して周知していく。
生徒指導部	○教育相談により、児童生徒が安心して生活できるように努める。	○教育相談週間を利用し計画的に相談に取り組むとともに、相談のしやすさ等環境整備も図る。	○児童生徒が相談に満足することができたか。	B	・児童生徒の「困っていること」を教員自身でも考える機会にもなった。一方、教育相談について理解不足の教員もいた。 ・教育相談期間は適切に実施でき、相談者の満足度も高かった。	・教育相談についての周知を更に進める。
	○学習指導部と連携し、人と関わる基礎的な力の向上に努める。	○「あいさつ運動」を展開することで挨拶することはもちろん、積極的に異年齢と関われるようにする。	○「あいさつ運動」中に自分から挨拶をする児童生徒が増えたか。	B	・「あいさつ運動」により他学部児童生徒の挨拶が増えたように感じる。 ・自分から挨拶する生徒が増えてきているが、異年齢との関わりがまだ少ない。	・「あいさつ運動」の拡充を図り異年齢との挨拶をまずは行うようにする（「あいさつ週間」などの設定）。
	○児童生徒について、継続的に情報や対応の仕方等、共通理解を行う。	○各学部等で共通理解を図りたい児童生徒の継続的な情報交換や新たな課題への対応を図る。	○定期的に行えたか。 ○情報を共有することで対応が統一され、課題解決の一助となったか。	B	・学部会やブロック会等で情報の共有化が図られた。 ・全職員に周知する場合は写真を提示した方が共通理解の一助となる。	・全職員周知の場合は写真を提示する。
健康指導部	○児童生徒の食に関する興味関心深めると共に基礎的な食事のマナーを身に付けられるように努める。	○食事の大切さや食事のマナーについて食育授業を行うとともに授業の前と後でアンケートを実施する。	○食育授業の前と後で児童生徒の食への関心の深まりやマナーの向上はみられたか。	B	・全学部で食育授業を行うことができた。その結果、児童生徒の食への関心やマナーの向上が見られた。	・繰り返しの指導が大切であるので、来年度も栄養教諭（学校栄養士）と教員が協力しながら食育授業を行う。
		○食育授業について食育だよりを通して紹介し、保護者への啓発をする。	○食育授業について食育だよりを通して紹介することができたか。	B	・食育だよりに授業の様子を掲載し、保護者に紹介することができた。	・来年度も食育に関する内容を掲載し、保護者に啓発をしていく。
進路指導部	○卒業後を見据えたコミュニケーションにおいて、情報提供することで、指導力の向上に資する。	○日中一時や実習先、就労先など、在校生がお世話になっている外部の機関において、自己表現に関してどのようなことが求められるか聞き、職員で情報を共有する。内容によっ	○会議や研修等の内容をまとめた記録を他の職員に回覧し、情報を共有することができたか。	B	・会議や研修等で得られた記録を学部会で発表したり、記録を回覧し、職員に知らせることができた。	・特に多数あったのは挨拶やコミュニケーションに関することであった。学習の中でも既に取り入れていることもあるが、得られたことを、今後の学校の学習の中にどう取り入れていくかを考えていく。

		て、保護者会や進路だよりを通し情報を提供する。				
渉外部	○渉外部が関わった研修等の情報を提供することで、指導の参考の一つになるようにする。	○各種総会や研修の資料を、シェアポイントに掲示したり回覧したりして、情報を提供する。	○各種総会や研修で配布された資料を、シェアポイントや回覧等で毎回報告することができたか。	B	・研修の資料を回覧等では報告することができた。 ・特教振大会記念講演のDVD放映会を行った。	・毎回情報提供できるよう、渉外部内で連絡調整して共通理解を図る。
	○家庭教育に関わる研修を中心に保護者に参加を募り、家庭教育の啓発を図る。	○保護者に研修や講演会の案内を配布する。また、内容を広く周知するため、役員会で報告したり、PTAだより号外を発行したりする。	○保護者に参加を呼び掛けることができたか。また、研修内容を発表する場を設けたり、号外を発行したりすることができたか。	B	・保護者に寄り添ったテーマの講演会の案内を配布し、参加を促したところ、数名ではあるが毎回参加希望があった。 ・特教振大会についての号外を発行することができた。 ・情報モラル研修を実施することができた。	・保護者のニーズに応えられるよう、研修や講演会の案内を配布する。 ・号外を発行したり、ホームページ上で情報提供したりする。また、希望者には講演会の資料を配布して、家庭教育の啓発を図る。
地域支援部	○行動上の問題やそれに伴う指導支援の方法等に関する情報を提供することで、指導の参考になるようにする。	○社会性の育成の基礎となるコミュニケーションの形成及び自己決定、行動調整にかかる情報を地域支援部通信としてまとめ、教職員に配布する。	○地域支援部通信を年6回以上、発行することができたか。	A	・具体的な事例が取り上げられており指導支援の参考になった、通信を読むことで児童生徒の見方が変わったなどの感想を頂き、十分な成果があったと考えられる。	・今後も可能な範囲で先生方の指導支援の参考になるような情報を発信していく。
	○育ちの部分で課題のある子どもたちについて理解を深めることにより、子どもたちの実態を多角的に捉えられるようにする。	○栃特サポートセンター研修会で、愛着や虐待など育ちの部分で課題のある子どもたちの実態把握、支援の方法等についての研修会を設定する。	○今後の指導支援に役立つ効果的な研修内容を設定することができたか。	B	・校内のみならず、校外の先生方にとっても児童生徒を理解する上で参考になったとの感想を頂いた。	・今後の指導支援のヒントという部分では一定の成果にとどまった。来年度も先生方のニーズを把握し、児童生徒の指導支援に役立つような研修内容を検討する。